

伝統を土台に、未来へ向けて 活力ある学校づくりを

社会の変化に対応しつつ、未来を生きる子どもたちを育む教育活動を行っていくために、小学校では具体的に何をしていくべきか。

「基調提案」(P.4～9)や「理論編」(P.10～19)を受け、3人の校長先生が学校づくりのビジョンや校長の役割、日々の実践の工夫について意見を交わした。

これからの公立小学校の役割

多様な子どもが共に学ぶ中で
「生き抜く力」を付ける

——これからの小学校教育について、具体的なビジョンとその方策をご提示いただければと思います。まずは、3校のご紹介をお願いします。

向山 本校は東京の銀座にあります。古くは地元商店の子どもが中心でしたが、今は医師や弁護士など専門職の子どもが多く、広域からの交通機関を利用した通学がほとんどです。

露木 本校は東京の下町情緒の感じられる町

にあり、ほとんどが地元の子供です。3、4代前から本校に通い、「学校がふるさと」と思ってくださいる保護者や地域の方が多いです。

加藤 本校は統合を重ね、2010年度で開校7年目というまだ歴史の新しい学校ですが、地域には古い歴史があります。校区は大阪の玄関口である大阪駅を含み、大阪市でも1、2を争うほど広域です。校舎はオープンスペースの造りが特徴です。

——では、公立小学校の役割について話を進めていきたいと思えます。「基調提案」「理論

東京都台東区立台東育英小学校校長

露木昌仙

つゆき・まさのり◎東京都公立小学校教諭、東京都荒川区教育委員会指導主事などを経て、現職。全国連合小学校長会対策部長を務める。
台東区立台東育英小学校◎2001(平成13)年、台東区立育英小学校、同区立柳北小学校の統合により開校。児童が取り組む育英太鼓、金管バンドは、地域の行事にも多く参加する。児童数は305人。



編」では、「今は改めて公立小学校の役割を見直す時期」というお話が出ました。先生方の考えをお聞かせください。

向山 学校の役割は、「今の充実を図ること」と「将来に備えること」の二つだと考えます。今を楽しく、豊かな気持ちで暮らせることも大事ですが、それだけでは将来、困ってしまう。そこで、多少の困難が伴っても後々役立つ学習をするなど、将来への備えが必要となります。時代の求めに応じて、この二つの役割のバランスをよく考えることが重要です。

露木 公立小学校は、多様な子どもが共に学

現在と未来をつなぐ小学校教育

ぶ環境にあることが特徴の一つです。特別な配慮を要する子どもや外国籍の子どもも含め、いろいろな背景で育った子どもが一緒に学ぶという環境を、どのように生かすかという視点が重要ではないでしょうか。

加藤 そうですね。多様な子どもたちが共に学んで育つ環境は素晴らしいことです。多様な個性を尊重し、一人ひとりを大切にした教育を進めることが、公立小学校の大きな特長といえるでしょう。また、地元の子どもたちがいるからこそ、地域の応援団が大勢いることも、公立小学校の強みだと思います。

最近よく思うことの一つは、これからの社



東京都中央区立泰明小学校校長

向山行雄

むこうやま・ゆきお◎東京都公立小学校教諭、東京都教育庁指導部指導企画課指導主事、東京都品川区教育委員会指導課長などを経て、現職。全国連合小学校長会会長等を務める。
中央区立泰明小学校◎1878（明治11）年開校。関東大震災復興事業として建てられた校舎は、経済産業省から「近代産業遺産」に指定されている。卒業生には島崎藤村や北村透谷ら、多数の著名人がいる。児童数は364人。

会を考えると「生きる力」では物足りず、子どもたちには「たくましさ」が求められ、「生き抜く力」が必要になるということです。これからの公立小学校は、そのような「たくましさ」を子どもたちに育むという強い思いを持って教育を進めていかなければならないと思います。その思いの表れとして、各校が特色を前面に出し、「こういう教育を進めますよ」という方向性を示すことが求められるのではないのでしょうか。

「福祉」「サービス」への役割拡大は「教育」の弱体化か

向山 学校の「特色」は、「活力」と言い換えられるでしょう。地域資源や伝統など、その学校が持つ良さと勝負するという考え方だと思います。西村先生がお話しされていたように（P.10参照）、学校の歴史をうまく生かして前に進んでいく必要があります。本校はモットーとして「伝統と進取」を掲げていますが、そこには伝統を重んじるだけではなく、「これからの教育をつくるためには、進取の精神が大切」という強い思いがあります。

露木

私は、保護者に対して「伝統と創造」についてよく話しています。学校の背景には地域住民のたくさんのおいがありますから、地域の応援団を上手に活用して本校らしい伝統を築いていきたいと考えています。それが、

先ほどからのお話にある学校の「特色」になるはずですが。そうした地域の財産は、新旧にかかわらず、どの学校にもあるでしょう。

今、難しいと考えているのは、公立小学校に「教育」だけでなく、「福祉」の役割を求める保護者が増えつつあることです。小学校は教育機関であると強く伝えていくべきだと思う一方、保護者の理解を得にくい現状もあり、悩ましいところです。

向山 私は「教育」と「福祉」は別物であり、分離する必要があると思います。現実には家庭に対して一定の支援が必要なのも事実ですが、それは相談をされたら助言する程度にと



大阪府大阪市立扇町小学校校長

加藤博之

かとう・ひろゆき◎大阪府公立小学校教諭、大阪府教育委員会教務部管理主事などを経て、現職。大阪府小学校長会渉外部長を務める。
大阪市立扇町小学校◎2004（平成16）年、大阪市立済美小学校、同市立北天満小学校の統合により開校。縦割り班活動を充実させ、リーダーシップ育成や仲間づくりに注力する。児童数は316人。

学力、そして授業づくりのために

どめるべきだと考えます。本格的に福祉にかかわると、学校の本体である「教育」が弱体化するという本末転倒な結果を招きます。むやみに公立学校の役割を拡大することは、公教育の衰退につながると思います。

加藤 おっしゃる通りですね。ただ、学習指導をしているだけでは、学校が成り立たなくなっていることも事実です。給食費の未納も含めた経済的な問題や、家庭の状況が多様化していることを考えると、学校には家庭を支援する仕組みが求められつつあるのではないのでしょうか。

露木 「教育」に「サービス」の要素が入り、拡大していることについても思うところがあります。6、7年前に受けた自治体の研修会で、学校も民間サービスのCS（顧客満足）の考え方を取り入れる必要があると伝えられました。しかし、「子どもが満足する教育」だけでよいのか疑問に思います。子どもが多少の無理をしても「大変だったけれど終わってみたら良かった」と感じられる経験が、結果的にその子を大きく成長させるからです。ところが、今は「子どもが先生に怒られた」と学校に苦情を言う保護者もいます。教師は一人ひとりの子どもをより良くしたいという思いを持っています。それはサービス業とは根本的に異なる考え方です。「学校は教育の場である」と、保護者に対してもっと発信すべきかもしれません。

「知・徳・体」を大切にしながら「徳」「考える力」の充実を

—公立小学校の役割を踏まえて、今後求められる学力について考えをお聞かせください。

加藤 星野先生がお話しされていたように（P.12参照）、日本の教育では「知・徳・体」のバランスのとれた子どもを育てることが重要だと思えます。その中でも特に、今後は道徳教育や人権教育を更に充実させ、自尊感情を高めると共に「徳」の成長を見据えて取り組む必要があります。こうした力が学習の土台になり、将来にわたり役立つと思うのです。

露木 同感です。「考える力」は、まず相手の発言を受け止めて認めた上で、自分の考えを表現するという「かわり合い」を通して伸びる力です。そうした子ども同士の関係は、加藤先生が話してくださったように、道徳教育で育まれると思います。子どもの規範意識の低下が指摘されますが、学習規律が守れる学級は、人間関係も円滑ですし、考えるレベルもどんどん上がります。

向山 日本の子どもの学力は世界でもトップレベルです。更に日本は、世界から好かれる国としても上位にいると聞いています。これ

らは、日本人が国際社会を生きていく上で重要であり、維持していく必要があります。その上で、「考える力」、すなわち課題解決のために習得したものを活用する力を更に高めて、国際競争が激しくなる中で新しい価値を生み出せる人材を育てなくてはなりません。

自分の授業の再現と教師同士の学び合いから学びが

—お話しいただいたような力を付けるために、各校でどのような取り組みを進めるとよいでしょうか。

露木 人とかわり合う力を育てる授業をつくることは、将来を考えると不可欠です。そのような授業でなければ、子どもは充実感を抱かないと思います。授業研究を通じて良い授業づくりを目指すことの大切さを説く、北先生のお話（P.14参照）に同感です。

向山 教師は誰でも「良い授業がしたい」と願っています。子どもが一番好きな先生も、休み時間に一緒に遊んでくれるだけの先生ではなく、授業が分かりやすい先生です。

小学校教師は、年間約1000コマの授業を受け持ちますが、授業力の向上に近道はあ

現在と未来をつなぐ小学校教育

りません。力を高める方法は、「他の先生に授業を見てもらう」「他の先生の授業を見る」「自分の授業の記録を取って分析する」の三つしかないと思います。他の先生の授業を見て、自分より少し低いと思ったら、自分と同じレベル。同じだと思ったらはるかに上で、少しすごいと思ったら神様のようなレベルです。また、三つの方法の中で授業記録は自分だけで出来ます。私はかつて、年間100コマの授業の板書を自らすべて記録すると共に、折りに触れてテープレコーダーで録音して文字に起こしました。これを繰り返すうちに、45分間の授業を振り返って再現できるようになり、授業の構成力が身に付きました。

露木 教師同士の学び合いの大切さも実感しています。本校はオープンスペースの校舎ですから、他の学級や学年の授業が互いに見えるやすい状態です。そうした環境もあって、学校には教師同士が遠慮せずに学び合う開放的な雰囲気が出ています。

加藤 確かに、切磋琢磨する環境がなくては、教師は伸びません。特に、教師の向上心は、授業研究を通して高められると思います。本校では、毎年、すべての先生に研究授業や公開授業の実施を課しています。そうした環境での学び合いはとても大切で、さまざまな角度からの意見を受け止めることが、授業改善を促していくものと思います。例えば、学級で、椅子の並べ方を少し変えたと子どもの視

点が変わることを知るだけで、新採の先生の授業が大きく改善されることもあります。

先生方にはそれぞれ得意分野があるので、校長がそれを見極めて担当を任せたりすれば本人は意欲的になり、ひいては授業研究もより活性化するのではないのでしょうか。

向山 授業研究の工夫として、参観者が発言や板書など10項目を4段階で評価する仕組みも取り入れています。5段階にすると真ん中の3に集中しますから、4段階で必ず良い・悪いを判断させるのです。そうした一歩踏み込んだ改善姿勢が授業を見る目を養います。

加藤 本校では、1か月間の学校公開期間を設けています。保護者や地域住民が大勢訪れますから、教師の緊張感が続きます。教材研究、発問や板書を工夫しようという気持ちも高まり、日々の授業改善につながります。ただし、業務が多い中で大きな負担にならないよう、校長には先生方の業務を調整する力が求められます。

**校長先生のサポートが
若手教師の授業への意欲を伸ばす**

露木 今後は若手教師の育成もますます重要になるでしょう。本校では、若手の先生に年3回の研究授業を課しています。そのうち1回は必ず全員が見るようにして、放課後に意見を交わす時間を設けています。先生方は直

授業研究教科名	授業者	学級
6年 社会 3人の武将と天下統一	平成 年 月 日 (X) 2校時	
時刻	授業の主な内容	
9:40	T スリットに名前を書く。毛判紙の 石印の跡が残った。今日は折 いてこぼし入る。 T 巻紙に名前を内蔵させる。 T 赤仁の石印の跡。どうやら 毛判紙 C 折半の紙と石印 光輝が... 下剋上にあつた 9:43 T 赤仁の石印の跡と、毛判紙の 石印の跡 T 赤仁の石印の跡と、毛判紙の 石印の跡 9:50 T 赤仁の石印の跡と、毛判紙の 石印の跡 C... 9:55 T... C... T... C... T... C... T... C...	

写真 向山校長が校長になってから取り続けている授業記録。教師、児童の発言と共に、授業時間も毎回記録。1年分を冊子にまとめ、教師全員に渡している

すべき点はきちんと指摘し、受ける側もめげずに耳を傾けています。「失敗してもよいから、自分なりの授業をしてみなさい」と強調していることの効果もあるのでしょうか。

加藤 若手の先生は厳しい意見に落ち込むこともありますが、校長がサポートすること大切にしています。私は研究授業は記録に取らず、事後検討会で事実に基づいて話し合う材料にすると共に、自分なりに気付いた細かい点と意欲をかき立てるような励ましのコメントを書き添えて本人に渡しています。

向山 私も、校長になってからの11年間、研究授業は必ず記録し（写真）、事後検討会で活用すると共に、年度末に冊子にして配布し

てきました。授業を担当した先生へのお礼の意味もあります。

若手教師の育成では、いかに成功体験をさせるかも重要です。ある新採の先生が、社会科の授業のために近所の老舗パン店に協力を申し込みました。最初は断られたので、私も一緒に訪問して再度お願いするなどフォローしつつ、その先生自身が交渉して授業をつくり上げました。すると、子どもは教材が面白いから乗ってくるわけです。年1、2回でもよいので、そうした経験をするとうまい授業をしたいという思いが強まります。

露木 他校の授業をたくさん見ることも、教師は間違いなく伸びます。そうした学びに導くことも校長の役目でしょう。「校内の仕事だけをしっかりとやれ」という発想ではないと思います。

向山 確かに、校外で研鑽を積むことは必要です。今後は、新採が増え、首都圏を中心に平均で1〜2校につき1人くらい配属される状況が続きます。一つの町に小学校が20校あれば、同期が10人以上はいるわけです。その同期が夕食も兼ねて集まって実践を持ち寄れば有意義な研修になると思います。

私が若い頃も新採の教師が多く、仲間です。私若くは先輩と学び合いました。互いに手厳しい意見も交わりましたが、それが成長の大きなきっかけになったのは間違いありません。当時の仲間は、今でも良い友人です。

組織づくり、小中接続を考える視点

学校ぐるみで方針を統一

「時間」へのコスト意識も重要

——教師同士の学び合いを支える組織のあり方や、その中で校長先生の役割を考える上で、留意すべきポイントは何かか。

向山 一つは、「時間」への意識を高めることです。従来の学校組織は、「モノ」に対するコスト意識はありましたが、「時間」に対するコスト意識があまりありませんでした。例えば、本校で職員会議を1時間行くと、時給換算で約10万円がかかっていることになり、会議で10万円分の価値を生み出さなければ、無駄に終わってしまうわけです。

露木 天笠先生が「協働」というキーワードを挙げられているように（P.16参照）、学級担任だけではなく、学校全体で一人ひとりの子どもを見ることが大切だと考えます。本校では、すべての教師が全校児童の名前を覚えて生活指導をしています。本校のように児童数が300人程度の規模であれば、十分に可能です。

特に、課題のある子どもの指導を担任だけに任せるのは負担が大き過ぎます。全員がかわる体制をつくることで、個々の負担が軽

減されるだけでなく、子ども自身にも良い効果がありますし、学校としてのまとまりも生まれます。

加藤 子どもの課題を全教師で共有することは、本校でも大事にしています。例えば、ある保護者からの電話に対し、どの教師も「存じ上げております」と同じ対応が出来れば、学校への信頼感は高まるでしょう。

露木 学校ぐるみで日常的な指導の方針を統一することも重要です。教科指導に比べ、学級経営を学ぶ機会は少なく、新採の先生の多くは自分の小学校時代を思い出して指導しています。例えば、名札や校帽の着用に関する指導が教師によって異なると、子どもの中に「あっちの先生の方がいいな」といった気持ちが生じて、子どもと教師の心にすき間が出来、学校の一体感が失われてしまいます。

加藤 教師の対応を統一することは、子どもに対してだけでなく、保護者や地域社会に対しても重要でしょう。それが学校組織を成立させる土台になると思います。

向山 そのような考えは大切ですが、校長が細かい指導の方針にまでかわる必要はないと、私は思います。組織の構成員にはそれぞれの役割があり、各人がそれをまっとうする

現在と未来をつなぐ小学校教育



ことが強い組織をつくる条件です。そういう意味では、天笠先生が話されていた、すべての教師が経営感覚を持つ必要性については、必ずしも当てはまらないかもしれません。

小・中学校の段差がもたらす 良い面についても議論を

——小中接続には、どのように取り組んでいけばよいでしょうか。

加藤 まずは、小学校と中学校の学校文化の溝を埋めることが大切です。無藤先生がお話しされていたように（P.18参照）、教師間の人的交流や課題の共有などから始めるとよいのではないのでしょうか。小中一貫教育を掲げる大阪市では、小学6年生が中学校の授業を見学したり、部活動の体験入部をしたりしています。中学校の教師も小学校で授業をするといった取り組みをしています。カリキュラムなどの接続へ向け、まずは互いの名前を覚え、人の交流を十分に進めることから取り組むのがよいと思います。

向山 小中は連携することがよいのは言うまでもありません。小学校と高校に挟まれた中学校の指導に難しさがあるのは確かですし、実際に中1ギャップも問題になっています。

ただ、段差があるからこそ、大人になるという自覚や気持ちの切り替えが出来る面にも目を向けるべきでしょう。戦後の日本は母性原理が強く、子どもが直面する障害をなくそうとする傾向が強かったと思います。一方、父性原理を持って突き放し、たくましく鍛えるという指導もあります。このテーマについて議論がほとんどない点は気になります。

問題行動の増加が懸念 校長のリーダーシップが重要

——最後に、今、特に重要と考えられていることをお話しただけですか。

向山 新課程では、国・社・算・理の教科書のページ数が平均で約3割増しとなるなど、学習内容は40年ぶりに大幅に増加しました。これにより力を付けていく子どもがいる半面、消化しきれずにストレスが増加し、反作用としての問題行動が起こることも懸念されます。まさに教育における戦後最大の課題に直面していると言えるでしょう。一生懸命に研修して授業力を高め、子どもと向き合う時間を増やす必要があると考えています。

露木 これからの小学校教育を考えると、管理職の育成が喫緊の課題だと考えています。若手の先生も含めて、ステップアップのための選考試験を積極的に勧めるなど、教師の育成にも力を注いでいく考えです。

加藤 今ほど校長のリーダーシップや決断力、判断力が求められている時はないと感じます。この変革の渦中において、「温故知新」よりも「温故創新」という考え方を大切にしたい学校づくりを進めていくつもりです。そして、校内で十分に情報を共有して教師間の意思疎通を図ると共に、保護者や地域社会への情報発信も強めていきたいと考えています。

——本日はありがとうございました。